

認知症の人の もの盗られ妄想への対応

群馬大学大学院 保健学研究科 山口 晴保

認知症とは、認知機能が低下して生活管理に手助けが必要になった状態をいいます。ですから、認知症の人は、生活にいろいろな困難を抱えています。

例えば、アルツハイマー型認知症のミヨさん。いろいろなものをしまい忘れて、見つからなくなると盗られたと言い出します。いろいろなものを盗られたと思っているので、財布を冷凍庫の中にしまったり、預金通帳を古新聞の中に隠したりと、必死に対策を立てます。茶碗や皿には自分の名前を書いて盗難を防ごうとするのですが、愛猫の背中にもミヨと書きました。認知症の人は、生活困難の中で、何とかしようと必死に生きているのです。

健全な人から見れば「バカな行動」と映り、つい、「なんてバカなことをするの」というてしまいたくなります。しかし、ここで本人の立場になって考えてみましょう。

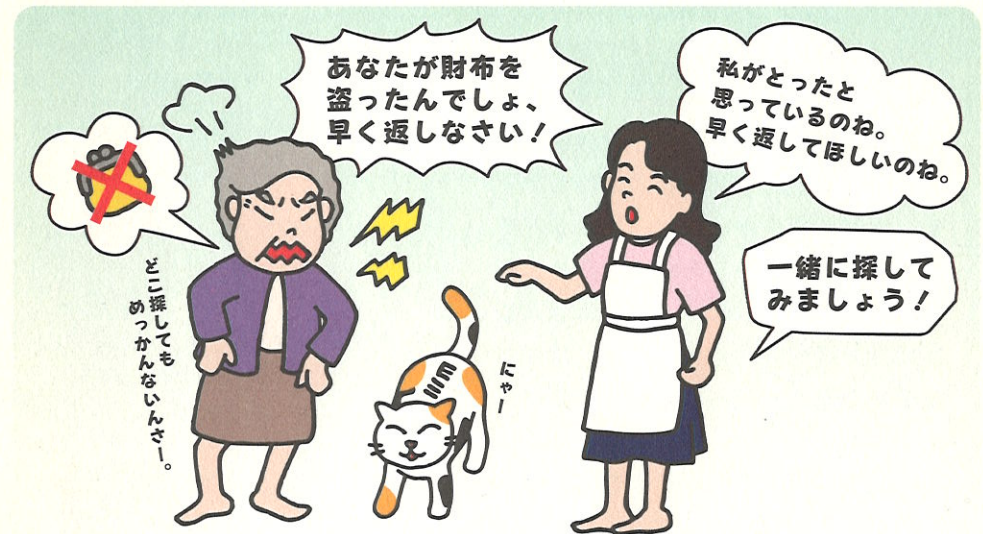
記憶が悪くなると、自分の行動を覚えていません。出来事の流れていきます。そして、日々の生活がうまくいかず、自分の置かれた状況がわからなくなり、「どうしてなんさー」「なにがなんだかさっぱしわかんねー」というような深い不安を味わっています。

このような不安を抱える認知症の人にどう対応したら良いのでしょうか？

認知症の人が、お嫁さんに向かって「あなたが財布を盗ったんでしょ、早く返しなさい」と言っている場面を想定しましょう。本人は、財布が見つからなくなり、近くに居る人を犯人と思ひ込みます。この思い込みは、いくら修正しようとしても修正が難しいので妄想といえます。説得して簡単に修正できるのなら妄想とは言いません。説得が無効なのです。



では、お嫁さんにはどんな対応が望まれるのでしょうか？本人の身になって考えてみると、「財布が見つからなくなり、嫁が盗った」が事実だと思い込んでいるのです。それを否定しても解決しません。読者の皆さん自身が、自分が信じていることを言ったときに、相手から「そんなことはあり得ない」と言い返されたらどうですか？ムツとして、さらに言い返したくなるでしょう。認知症の人も同じです。自分の言うことを頭から否定する人には腹が立ちます。ですから、お嫁さんが、「私が財布をとったと思っているのですね。財布を早く返してほしいのですね」と、相手の言うことを繰り返して言うことから始めるとよいでしょう。相手の言うことを繰り返すと、言った方は、この人は自分の言うことを聞いてくれたと感じます。それから、穏やかに「一緒に探してみよう」と持ちかけます。感情は伝染するので、ムキにならず、どっしりと構えて対応すると良いでしょう。



日頃から、認知症の人に対してバカにした態度をとらないことや、あなたを大切に思っているというメッセージを伝えることも、犯人扱いされるのを防ぐことに有効です。

やまぐち はるやす
山口 晴保



群馬大学大学院保健学研究科・教授

1976年に群馬大学医学部を卒業後、群馬大学大学院博士課程修了（医学博士）。専門はアルツハイマー病の神経病理学やリハビリテーション医学（日本リハビリテーション医学会専門医）。アルツハイマー病の病態解明を目指して、脳βアミロイド沈着機序をテーマに28年にわたって研究を続けてきた。また、認知症の進行を防ぐ脳活性化リハビリテーションにも取り組んでいる。これらの研究成果を集大成し、2005年に『認知症の正しい理解と包括的医療・ケアのポイント—快一徹！脳活性化リハビリテーションで進行を防ごう—』（協同医書出版社）を出版した。一方、群馬県地域リハビリテーション協議会委員長として群馬県の地域リハビリテーション連携システム作りを注ぎ、2006年から「介護予防サポーター」の育成を進めてきた。また、ぐんま認知症アカデミーの代表幹事として、群馬県内の認知症ケア研究の向上に尽力している。日本認知症学会副理事長、日本老年精神医学会評議員、日本認知症ケア学会評議員、第27回日本認知症学会学術集会（2008.10、前橋）会長。